

歴史点描 27 網干区津市場北 琴平神社

さて、神社へたどり着くにはどう行こうか、ランドマークだった村の火の見櫓も鐘が降ろされてポンプ車庫のみになっている、ままよ、ここを手掛かりにして北へと向かう。

だいはち
大八車がやっと通れるほどの道幅ながら、唯一南北へと通じる道に屋台蔵が見えてきた。だが昭和59年版住宅地図は同所を駐車場と記す。元の場所について、昭和8年新調された屋台はもと大工職の本多菊雄氏の仕事場に置かれていたとの榎田女史からの情報を得たが、太平洋戦争中を含む50年間の記憶の隙間は埋まらなかった。

西へ折れた小路の先にある琴平社境内はさして広くはないが、ここが小字でいう「砂田」で、おおなむちのみこと大己貴命を据える琴平神社には合祀神はない。出雲神話に登場する国津神、すなわち国造り神話の大己貴命のみの深いわけは「砂田」の生成を促した水利が関わっているようだ。石見庄と福井庄の境となる小川のゆるやかな流れは、やがて砂泥を堆積し微高地になると自然と左右に分流し人々はそこを「砂田」と呼んだ。もしかするとこの辺りが出屋敷の始まりの地かも知れない。

宝暦10年(1760)辰10月の銘をもつ「津市場村明細帳」に、家数43軒但し(東西126間 南北44間・本村)東西55間 南北44間、家数41軒但し出屋敷と記され、分村が進んだことを記しているが、41軒がいっせいに移住したのではなく、労働意欲の高い若者たちが水利の得やすい村内北部の砂泥地(砂田)で田作りを始めたのだろう。まず田地の中に農具を保管する小屋を建て、寝る間も惜しんだ彼らはやがて出小屋(仮小屋)を設け宿とした。新田開発や開拓において類例の多い「出屋敷」地名の起こりである。北接する坂上村でも出屋敷が派生、呼び名短縮され現在の「坂出村」が成立した。

網干歴史講座 垣内 田中早春



少し古い時代の津市場火の見櫓



分流は清冽な流水を湛え社地脇を西へ向かう